

---

# 超劇的冒険 東方真文録

99式神話

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

超劇的冒険 東方真文録

### 【Nコード】

N4726D

### 【作者名】

99式神話

### 【あらすじ】

僕は明日、十七歳になる 容姿端麗、文武両道、将来安泰。大病院の跡取りの高校二年生、宝路イズルは、学校のアイドル的存在。しかし、イズルは男と育てられた女だった。誕生日の前日、父親に急に女に戻り結婚するよう告げられ、しかも、父は本当の父親ではないという真実を知る。次々と明かされる、自分の出生の秘密。そんな混乱の最中、イズルはひよんな事から、学校に潜む妖しげな機械に飲み込まれた。！そして、たどり着いた先は……？急変する運命！今、予想もつかない大冒険が始まる！！

第1話「東の国より、ひかる・イズル？」 巻（前書き）

スーパードラマティカルアドベンチャーとうほうしんぶんろく……  
東真録

## 第1話「東の国より、ひかる・イズル？」壱

僕は、明日、十七歳になる。

2XX7年4月20日      トキオシティ。

「ふざけるな！」

爽やかな朝に似つかわしい怒号が、街の一角を占める、和風の屋敷に響き渡る。

激しく両手で叩き付けられたテーブルの上の食器がかすかに揺れ、白い学生服袖から伸びる、イズルの白い両手は震えている。

上品なアッシュカラーのショートヘアーから覗く瞳は怒りに溢れ、美しい切れ目が更に鋭さを増していた。

「ふざけてなどいない」

四十代後半の男性が、イズルの怒りに動じることなく、冷静に返し、湯呑みの中の茶を口に含む。

大病院・宝路病院<sup>たかみち</sup>の院長、治。イズルの父親である。

「どうしていきなり……僕は、病院を継ぐために、今まで勉強も何もかも、頑張ってきたのに」

イズルは、父を真つ直ぐ見据えた。

「病院は、他の者に継いで貰う。お前はもういい」

「そんな！僕は父さんの為に、今まで言う事を聞いてきたのに、どうして、父さん」

「私は、父ではない」

「エ？」

「お前は、この家の人間ではない。」

お前は、小夜子と、他の男の間に生まれた子供だ。病院を継いで貰う気はない」

「……嘘だ」

「病院は、お前のいとこの、青山満輝<sup>みつぎ</sup>に継いで貰う。お前は満輝と

結婚しろ」

「何だつて？」

「小夜子が死んで十七年、お前を男として育てて来たのは、病院を継がせる為だ。だがもういい」

治は茶を飲み切り、再びイズルを見た。

「イズル、女に戻れ」

「そんな……」

「それだけだ。お前には、もう話す事はない」

呆然とするわが子を見る様子もなく、治は立ち上がった。

残されたイズルの瞳には、目の前のグラスの、琥珀色のアイスコ

ーヒーが揺れていた。

「イズルさん、大丈夫ですか？」

あんまりです。お父様の為に十七年間頑張つて来たのに、何も誕生日の前日にこんな事を……」

一部始終を見ていた使用人が、思わずイズルに声をかける。

幼少の頃より、母を亡くしたイズルの面倒を見てきた女性だった。

「ぼ・僕、今日は、学校を休みます。何が何だか……」

イズルはそう言つと、ふらふらと歩き出し、自分の部屋に入り、倒れこむようにベッドに身を任せた。

窓から春の優しい風が吹き込む。そして、外に揺れる木々の緑と、その狭間から見えるビルの地肌をぼんやり眺めた。

イズルは病欠以外で、初めて学校を休もうと思った。いや、先程のショックで、休まざるを得なかった。

## 第1話「東の国より、ひかる・イズル？」 貳

それから、十数分経ったであろうその時、

「イズルちゃん、学校いこー！」

玄関の方で透明感のある高い声が響いた。

「げ、ひかるだ」

イズルは、反射的に布団を深く被る。

と、同時に使用人がイズルの部屋をノックし、ドア越しにイズルに声をかけた。

「あのう、イズルさん、ひかるさんがお迎えに来ていますが」

ひかるは、イズルの幼馴染。

イズルよりひとつ年下で、兄のようにイズルを慕っている。

イズルを迎えに行くのはひかるの日課だった。

「すみません、今日僕学校を休むので、一人で行くように伝えて貰えますか」

「そうですね、わかりました」

使用人が玄関に戻った。

すると、玄関は遠くてよく聞こえないが、何か言い合いのような声が聞こえる。

少し続いたあと、廊下をドタドタと歩く音が聞こえた。

イズルは部屋のドアを少しあけ、そつと廊下を覗いた。

「イズルちゃん！」

イズルがわずかに開いたドアは、急に大きく開いた。そこには、ひかるがいた。

白いセーラー服がよく似合う少女。栗毛色のふんわりとした巻き髪が揺れ、大好きなイズルを発見した大きな瞳が輝く。

「おはよう、イズルちゃん。ひかる、迎えに来ちゃったの」

ひかるは、容赦なくイズルに抱きついた。

「あのね、今日僕は学校休むから……」

「なあに？元氣そうじゃない」

と、全くイズルの話を聞かずに言うと、額をイズルの額に当て、  
「お熱もないみたいだし」

両手で、頬を触り、

「顔色もいいの」

そして、むんずとイズルの手を取り、

「さあ、学校へ、レッツ・ゴーなの」

突然、宝路家の長い廊下を爆走した。イズルはついて行けず宙に  
浮く。

「うわッ！ひ・ひかる、ちよつと待った！」

ひかるは、急ブレーキ音をあげ、急停止した。

それにと半拍遅れに「ぷりん」と幼い顔に似つかわしい、ひかる  
の巨乳も静止した。

ひかるはきよとした顔でイズルを見ている。

「あのね、僕ね、今日は本当に調子悪いからさ、ごめん」

イズルは部屋に戻り、ベッドに座った。

後を追って部屋に入ったひかるが、少しふくれっ面で言う。

「だめ」

「もう。だから僕は……」

「だって、今日のイズルちゃん、何だか悲しそうなの。一人でいち  
や駄目なの」

「ひかる……」

「ね、学校行こうよ、外は晴れて気持ちいいよ。ひかるがイズルち  
やんを元気にするの」

ひかるはぎゅっと後ろからイズルを抱いた。

「今から行っても遅刻だよ。それに僕、まだ教科書とか準備してな  
いし」

「い・い・の。ひかる、待ってるの」

「はあ、ひかるにはかなわないな」

イズルの言葉を聞いたひかるは、無邪気に笑った。

## 第1話「東の国より、ひかる・イズル？」参

イズルは手早く準備をして、そして、二人で外に出た。

ひかるはイズルと一緒にの登校で、まるでまわりに音符が飛び散っているようにご機嫌。

イズルは道を歩いているものの、父との一件で上の空だった。

「ねえ、イズルちゃん」

「うん……」

「すつごくお空が晴れているの」

「うん……」

イズルはどこか遠くを見ている。ひかるの声は届いていない。

「ねえ、イズルちゃん？」

「うん……」

ひかるは少しうつむき、頬を染めて話す。

「ひかるは、今十五歳で、イズルちゃんは、明日で十七歳よね？」

「うん……」

「来年、ひかるが十六歳になって、イズルちゃんが十八歳になったら、結婚出来るよね」

「うん……」

「そしたら、イズルちゃん、ひかるの事……お嫁さんにしてくれる？」

「うん……」

イズルのこの言葉を聞いたひかるは、急に立ち止まった。

イズルは歩き続けていたが、ふと我に帰り、横にいたはずのひかるがいない事に気付く。

「あれ？何の話していたっけ。ひかる？」

と、後ろを振り向くと、ひかるが、感極まって震え、

星屑が飛び散るように瞳を輝かせ、イズルを見つめている。

イズルは事の見当が全くつかない。



「ひ・ひかる？」

「イズルちゃん……！」

「エ？何、何？」

「ひかる、嬉しいの〜！」

ひかるは叫ぶと、土煙が立つ程のダッシュでイズルに突進してきた。

「な・何だあ？！」

ひかるが、ホップ・ステップ・ジャンプでイズルに向かって飛びかかってきた。

イズルは、それをひらりとかわすと、ひかるは、そのまま勢い良く電柱に抱きついた。

「イズルちゃん、ひかる幸せらのお〜」

ひかるは瞳をハートマークにして、幸せ一杯に両腕両足で、しっかりと電柱に抱きついている。

「あ・危なかった。というか、僕は電柱かよ……」

イズルは呆気にとられたまま凝視し、そして、冷静に呼吸を整え、ひかるに話しかけた。

「あのー、もしもーし。ひかるー？僕はこっちだよ、よいしょつ」と、電柱にがっしりしがみつくとひかるを引き剥がした。

「あれ？イズルちゃん？」

ひかるは、ようやく我に帰り、電柱とイズルを交互に見る。

「あつ！ひかる、間違っちゃたの〜。ごめんなさいなの〜」

顔を真っ赤にして、愛くるしく笑った。

見慣れたひかるの笑顔も、今日は、いつもと違う感情で見えてしまう。

ひかるも、知らないんだよな。本当の僕の事……。

ぼんやり思いかけた時、遅刻している事を思い出した。

「ほら、早く行くよ、ひかる」

イズルはそう言っていると、走りだした。

「あつ、イズルちゃん、待って！なの〜」

ひかるは、鞆を重そうに持っている。

それを見たイズルは、黙ってひかるから鞆を取り、また走り出し、振り返り手招きした。

ひかるは、また瞳を煌めかせ、「ぷりん」と胸を弾ませながらイズルの後を追った。

そして、二人が学校・トキオエクセレント高等部に到着すると、休み時間の学校前広場は、騒然とした。

## 第1話「東の国より、ひかる・イズル？」四

イズルは学校で有名な人だった。

頭脳明晰・運動神経抜群、そして大病院の跡取りの美少年。

高等部のちよつとしたアイドル的存在で、追っかけの女学生までもいた。

そのイズルが、女子生徒と遅刻。

高校生の情事なんて珍しくない。

しかし、学校一のアイドルとなれば、話は別。

最高のゴシップである。

辺りは、井戸端会議のオバサンよろしく、興味津々に、二人視線を向け、ひそひそ話を始めた。中には泣き出す女子生徒までいる。

イズルはその矢のような視線の居心地の悪さに閉口したまま歩いた。

ひかるは、まるで気付いていない。

「イズル！」

居心地の悪い空間を切り裂くように、後ろから声が響いた。

振り向くと、そこには、鳩が豆鉄砲食らったような顔の、ユーゴとマリンがいた。

二人はイズルの同級生で友人。

短髪に太眉、いかにも体育会系のユーゴは、間髪入れず後ろからイズルを羽交い絞めにした。

「お前ええええ、俺が先週フラれたばかりなのに、お前って奴あ！コノヤロー！しかも巨乳ちゃんじゃねえかよー！」

と、ユーゴは、更にイズルを力任せに羽交い絞めした。

「ぐわあっ、苦しい！やめろ、ユーゴ」

「そうだ、俺は先週フラれたユーゴなんだよー！コノヤロー！羨ましいんだコノヤロー！」

「離せ、てか、落ち着け、ユーゴ！ひかるはただの幼馴染だって。」

近所に住んでるの。今年高等部に入ったから、俺を迎えに来てくれただけなの！」

イズルは精一杯叫んだ。

「エ？ホント？」

「本当、本当！」

ユーゴの手は緩み、イズルは開放された。

「アハハ、ごめんなイズル。いやあ、びっくりしたよ。今まで浮いた噂がひとつなかった、イズル君が女の子と同伴登校なんて。俺実は、もしかしてイズルってホモ？まで思ってた心配してたんだけど、いざ可愛い子ちゃんを連れてくるのを見て、俺も混乱しちゃって」

「いいんだよ、ユーゴ君、わかってくれれば！」

イズルが両手を広げ、少し大袈裟に言うと、ユーゴも大袈裟に感動して、

「イズル君っ！」

と、友情ドラマよろしく大袈裟に抱き合った。

「そうなの、今日ひかる、イズルちゃんの部屋から二人で来たの」

その時響いたのは、ひかるの能天気な声。

「エ？マジで？じゃあ、イズルの部屋にずっといたって事だよな？」  
もう一人の友人マリリンが、長い前髪をかき上げつつ、淡々とひかるにインタビューしている。

「うん、そうなの。イズルちゃんベッドから中々動かないから、ひかるが後ろから抱きしめて、元気にしてあげるって言って、学校に来たの」

「おい、ベッドって、こりゃ……」

マリリンは、クールな表情だが、声に躍動があった。

ひかるはるるんで続ける。

「それでね、さっきイズルちゃん、ひかるをお嫁さんにしてくれるって、言ってくれたの」

「ちがっつッ！」

イズルは反射的にユーゴを突き飛ばし、血相変えて、ひかるとマリンの間に飛び込んできた。

「ひかる、その言い方はちょっと違うだろ」

「ひかる、って呼びなれているじゃん」

マリンが鋭く突っ込む。

「いや、だから、これは、幼馴染だから」

イズルは必死に言い訳をする。

「イゝズゝルゝ」

先程突き飛ばされたユーゴは、ゾンビのようにゆらりと立ち上がったかと思うと、再びイズルを羽交い絞めにした。

「イズル、許さんゝ！」

「ユーゴ、やめろ、やめろおゝ！ぐええ」

イズルは、先程とは比べ物とはならない締め付けに、思わず嗚咽をあげた。

「何か面白いのゝ」

「お前のせいだあッ！」

ひかるの天然な発言に、イズルが突っ込む。

マリンは顔をそらして、息を殺し、腹をかかえ笑っている。

その時、ドサツと荷物が落ちた鈍い音がして、全員その音の方向を見た。

そこには、拳を握り締め、震えあがる一人の少年がいた。

## 第1話「東の国より、ひかる・イズル？」伍

「あ・庵野丈」

マリンがクールに呟く。

庵野と呼ばれたマツシユルームカットに眼鏡の背の低い少年は、下を向いたまま震えている。

足元には、鞆と、弓道の弓と、矢の入った筒が落ちていた。

「なあ、あいつ、ひよつとして巨乳ちゃんの事好きなんじゃね？」

ユーゴがイズルを羽交い絞めにしたまま呟いた。

イズルは黙って見ている。

庵野は、イズルに向かい一歩、また一歩前進し、口を開いた。

「宝路、お前。許さん」

「は？あ、いや、庵野君？これは誤解なんだって……」

イズルは愛想笑いで応対したが、庵野はまるで聞いていない。

「あー、こりゃ一部始終見てたね。『僕の天使を汚しやがって』とか言ったりして」

マリンが、淡々と話す。

庵野は堪え切れなくなったように絶叫した。

「ひかるさんは、僕の、僕のッ、僕のおおおッ！ 貴様、僕の天使を汚しやがってー！」

「案の上ー！」

イズル・ユーゴ・マリンの声が合唱のように響く。

「しかも、あーんなコトやこーんなコトもしたなんて、宝路、許さん、覚悟！」

庵野は、あつという間に弓に弦を張り、次々と矢を放ってきた。

矢が雨のように降りそそぐ。

「ギャー！」

ユーゴはとつさにイズルを開放して逃げ出した。

イズルも矢の雨の中を逃げる。

「うあああゝ！ユーゴ、逃げるなんてズルいぞ！ シャレになつてないって、何で僕がこんな目に遭わなきゃいけないんだー！」

イズルの絶叫が、学校前にこだました。

逃げるイズル。

矢は変わらず降り注ぐ。

そして、その中の一本の矢がイズルの頬をかすめ、その白く透明な肌に、赤い血が滲んだ。

イズルが、そつと頬に手を当てると、指先が紅に触れたように染まっていた。

イズルは、その手を見ると、握り締め、下を向き、震えて呟き出した。

「今日は朝から」

イズルは顔を上げ、庵野に近づいた。

「やばい、これは」

マリンが、呟く。

「イズルがキレル、押さえろ！庵野が危ない！」

ユーゴがそう言って走り出すと、マリンも一緒に走り出した。

「何なんだよー！」

イズルは人が変わったように叫ぶと庵野の持っていた弓を取り上げ、真つ二つに折った。

「ギャー！ぐ・グラスファイバーの弓がああああ！」

庵野は予想外の出来事にあたふたしている。

「イズルー、やめろー！」

駆けつけたユーゴとマリンがイズルを押さえた。

「うるせええええええ！」

イズルは、ユーゴとマリンを跳ね除け、ユーゴとマリンは、豪快にぽーんと飛んでいった。イズルは再び庵野を見た。

「おい、庵野、お前わかってんだろうな？」

イズルは、目が据わっている。もはや別人だ。

「あ、いや、僕、どうかしてたよ、カツとなつてさ。た・宝路、悪

かつ……」

庵野は、混乱しながらイズルに謝罪したが、イズルは無言で庵野の胸ぐらを掴んだ。

「ギャー！許してー！」

庵野が絶叫したその時。

「おやめなさい！」

華やかな、だが、威厳に溢れる声が響いた。

まわりの野次馬が、何かに一線を引くように、次々と道を空ける。その中から、一人の少女が現われた。



## 第1話「東の国より、ひかる・イズル？」六

「朝から一体何ですか？ 騒々しい」

真っ直ぐな長い髪、長いスカートを靡かせ、少女は鋭い目線で言い放った。

イズル達も、まわりの野次馬達も、その少女の言葉に答えない。いや、答えないというより、関わりたくないという雰囲気だった。「ふつ。相変わらずですわ」

少女は野次馬達の顔を見渡すと、鼻で笑った。

「みなさん、朝から、本当に間抜けな顔ですこと！ わたくしのお父様が指揮する学校で、そんな顔しないで下さる？」

少女の言葉に、野次馬達の空気が変わった。明らかに、反発を含んだ空気。

少女は、その空気に少しも動じず髪をそつと払い、まわりを睨む。「何？ 文句があるなら言いなさい」

誰も、何も言わない。

「所詮、あなた達はでくのぼつ、って所かしら？ さあ、もう授業が始まる時間ですわ、さつさと教室にお戻りなさい。」

この学校は、あなた達の阿呆面を作る為にあるのではなくてよ！」

少女の言葉に不穏な空気を漂わせつつも、野次馬は散り、教室に戻っていった。

イズル達だけ残っている。ユーゴは、マリンに耳打ちした。

「おい、アレ、生徒会長だろ？ 本当嫌な女だな」

「鈴木結花乃さん、ね。政治家の娘だし、俺は、余計な事は言わねえ」

マリンが、ぼそつと答えると、その少女 生徒会長・鈴木結花乃は、イズル達の元に近づいてきた。

「あなた達ね？ 朝から騒ぎを起こしたのは。どのような事情？」

あなた、二年生の宝路君ね。これから生徒会室に来ていただきますわ」

その言葉を聞いて、ひかるはイズルの元に駆け寄り、両手でイズルの腕を掴んだ。

「ひつ、ひかるさん、こんなヤツの腕なんて!」

庵野が、慌ててイズルからひかるを引き離そうとする。

「騒々しい男ね。あなた、お名前は? どのクラスかしら?」

結花乃は、庵野に尋ねた。

「に・二年C組、庵野丈、だ」

「アンノ、ジョー? おーほっほほ! 案の上単純な名前です」と!

「な、何だつてえ? 失礼だぞ、謝れ!」

「さあ? 謝るのはあなたでなくて?」

「何?」

「わたくし、あなたと話す事によって、人生の貴重な時間を、無駄に使ってしまったのよ」

「はあ? お前、調子に乗るのもいい加減に……」

「何か?」

庵野を突如捉えた鋭い目線。その、結花乃の眼差しに、庵野は、思わずたじろいだ。

「あ、い・いや」

「ふん、ふがないこと。さあ、そのあなた達、さっさと教室にお帰りなさい!」

ユーゴとマリンは目で「すまん」と、イズルに謝りつつ、その場を去った。

庵野も渋々教室に戻る。ひかるだけが、イズルにぴったりくっついて離れない。

結花乃は、ひかるを黙ったまま見た。

ひかるは、結花乃の目線に震えるように、イズルに寄り添う。

「あなた、一年生?」

結花乃がひかるに問いかける。

「うん、じゃなく、はい」

ひかるが小さい声で答える。

「教室に行きなさい」

「でも……」

「行きなさい」

結花乃は、ひかるの言葉を切るように、はっきり言った。

「ひかる、行けよ」

イズルはそう言つと、ひかるの手をそつと解き、結花乃の元に行つた。

「さあ、こちらへ。宝路君」

結花乃がイズルを先導して、歩き出す。イズルも後に続く。

「イズルちゃん！」

ひかるはその場に立ち尽くしていたが、去り行くイズルに向かって呼びかけた。

イズルは、ひかるを見ずに振り返る。

「何だよ」

「ごめんなさい、なの。ひかる反省してるの」

「……わかつているよ。大丈夫だから」

そう言つと再び歩き出し、イズルと結花乃は校舎の中に消えていった。

## 第1話「東の国より、ひかる・イズル？」七

「大丈夫ですか？」

結花乃が救急箱から、消毒液のついたガーゼを取り出し、イズルの頬に当てた。

少し薄暗い生徒会室に浮かぶ、二人のシルエット。

「あの、話は」

イズルが静かに、口を開く。

「いいのよ、何も言わなくても大丈夫ですわ」

「じゃあ、どうして僕を呼んだんですか？」

イズルの言葉に、結花乃がうつむく。

潤んだ瞳は、先程から想像もつかないような、少女の瞳の色だった。

「話がないなら、僕教室戻ります」

「宝路君」

結花乃は、イズルの向かいに座った。唇が、少し震えている。

「宝路君、あのコがあなたの恋人なんて嘘よね？ あなたがあんな子供っぽいコを相手にするなんて」

結花乃の声は、弱々しかった。イズルは思わずため息をつく。

「何だよ、みんなして。あいつはただの幼馴染なのに」

「本当？ よかった……」

誰にも見せた事のない柔らかい結花乃の笑顔。

この顔を誰が想像出来るであろうか。

しばしの沈黙。

「もう、いいですか？」

沈黙の糸をちぎり、イズルが立ち上がろうとした瞬間、結花乃の手が、机の上にあったイズルの両手を包んだ。

イズルは眉ひとつ動かさず見ている。

「待って、宝路君。私、あなたの事が……」

イズルは、結花乃の言葉を最後まで聞く事なく、素早く結花乃の手から離れた。

結花乃はシヨックを隠しきれない表情でイズルを見上げる。何かを乞うように、揺れる瞳。

「悪いけど、僕はアンタの気持ちに応えられない」  
唇を噛み締める結花乃。

イズルはその結花乃を見る事もなく、生徒会室を後にした。閉じた扉に背もたれ、空を仰ぐ。先程より更に深いため息が、騒ぎの疲れを吐き出すように漏れる。

そして、ふと、横を見ると、トーマポールのように縦に並び、生徒会室の壁に向かい、耳をそばだてているユーゴとマリンがいた。イズルに気付かれてしまった二人は、とびっきりの愛想笑いでその場をごまかそうとしている。

「お前ら、何やってんの……？」

イズルは、ユーゴとマリンに、呆れた口調で言い放った。

## 第1話「東の国より、ひかる・イズル？」八

「なあ、許してくれよ、イズル、この通り！」

強く掌を合わせた音が教室に響く。深々と頭を下げているユーゴ。イズルは生徒会室での一件を盗み聞きされて、ご機嫌斜めだ。

「もう、やらない？」

「勿論だって！ ほら、マリン、お前を謝れよ！」

ユーゴがマリンをひじで軽く突付き促す。

「悪いけど、僕はアンタの気持ちには、むぐっ……」

イズルの口調で話し出すマリンの口を、ユーゴが慌てて塞いだ。

「馬鹿っ、お前！」

裏返った声で、ユーゴがマリンを叱る。

「ゴメンヨー、イズルくん、ボクハ、ワルギガナカタンダヨー」

ユーゴは、後ろから両手でマリンを操り人形のように操り、裏声で話した。

さすがのマリンも愛想笑いをしている。

「……今度からしないでよね」

イズルが呆れながら、ぽつりと呟いた。

「勿論さあ！ さすが、イズル。心が広いぜ。あー良かった！ ははは！」

ユーゴが豪快に笑いながら、イズルの肩を叩いた。

マリンは、何を考えているか掴めないが、楽しそうだった。

イズルは、この感じが嫌いではなかった。この友達二人といると何か安心するのだ。

「さ、昼休みだし、体育館にバスケしに行こうぜ！」

ユーゴが率先して教室を飛び出した。昼休みのバスケットボールは三人の日課だった。

イズル、ユーゴ、マリンは、学校でわりかし目立っていた。

その中でも、イズルの人気は抜群で、昼休みには、イズルを見る

為に女子生徒が体育館に集まった。

イズルは、コートの上で、実は女とは思えない程の活躍をしている。

その度、黄色い歓声が沸く。

いつもの光景。

だが、今日は居心地がかなり悪かった。

原因は、あの、父の言葉。

イズル、女に戻れ

僕は、一体誰なんだ……。

「たかみちクーン！」

「イズルクーン！」

体育館に声援がこだまする。

みんな、あんな風に騒いでいたって、本当の僕の事、何も知らないじゃないか。

イズルちゃん

宝路君

ひかるも、会長も。

イズル！

イズル

ユーゴも、マリンも。僕は友達まで騙しているじゃないか。

イズル、お前は女だ

父さんだって、どうしていきなり……。

イズル、お前は私の子ではない

どうして？ 僕は今まで、父さんの為に……。

たかみちクーン

イズルクーン

イズルちゃん

宝路君

イズル

イズル……

僕は、一体誰なんだ……。



## 第1話「東の国より、ひかる・イズル？」九

「宝路……おい、宝路！」

！

担任が自分を呼ぶ声で、まどろんだ世界が、一瞬で弾け飛んだ。  
気付けば帰りのホームルーム。

「大丈夫か？どこか調子が悪いのか？」

瓶底眼鏡の下から、担任・井之頭が心配の眼差しを向けている。  
父と同年代であろう、この担任は、父とは全く反対の穏やかな男だった。

「い、いえ、大丈夫です」

「そうか、それならいいが。もう一度言う、帰りに理科準備室に来るように」

「エ？」

「今日は、宝路にしては珍しく、遅刻したからな。宿題を渡すからあと、窓拭きもして貰おう」

えー、面倒、だな。

「はい、わかりました」

嫌な事も、素直なフリをして返事をする。イズルの癖だ。

「じゃあ、今日はこれで終わり。日直」

井之頭の声を含図に、日直が帰りの挨拶をして、次々と生徒が教室から出て行く。

その並に一人逆流して、ユーゴとマリンがイズルの元に来た。

「イズル、遊びに行こうと思ったけど残念だな。てか、お前、明日誕生日だろ？ 明日何かおごるよ」

「マジで？ サンキュー、マリン」

「エ？ 明日？ そうだっけ？ じゃあ、明日俺様が、流行りのゲーム『オーラバトラー』の、特別レクチャーしてやろう！ わははは！」

ユーゴは、いつものように豪快に笑うと、

「じゃ、悪リイけどお先に！」

と鞆を持ち上げた。ユーゴに続くように、マリンも鞆を肩にかけ  
る。

「イズル、明日な」

「二人とも気を付けて帰れよ」

イズルは、二人を見送ると、鞆を持ち、教室を後にして、理科準備室に向かった。

間もなく到着し、扉をノックしたが、反応がない。

ただ聞こえないだけだろうと、ドアノブに手をかけ、少し扉を開く。

すると、わずかな隙間から暗闇が漏れた。

更に扉を開くと、カーテンを閉め切ったその真つ暗な部屋で、卓上の蛍光灯が、やんわりと井ノ頭のデスクを照らしていた。

「先生？」

部屋の隅で作業でもしているのだろう、と一歩踏み込み、入り口近くの隅に視線を向けたが、相変わらずそこは沈黙の空間。

隅から視線をずらすと、再び、目に付いたのは、卓上蛍光灯だった。

まるで、黒い空間の中で、手招きをしているように、やわらかく光る。

イズルは何故か、その光に引き寄せられるような感覚に陥り、歩き始めた。

人体模型や、骨格模型の前を通り、デスクの前に立つ。

整理整頓されたそこには、古ぼけた赤い一冊の本が、意味ありげに置いてあった。

デザインからして日記か。

イズルは、これは見てはいけないと思い、振り返ろうとした。

その時、その赤い本の下に、半分ほど写真が、はみ出ている事に気付く。

そして、そこに写る栗色の髪の毛が視界に入った時、イズルの体が凍りついた。

忘れもしない、昔から見慣れた色。幼い日頃から、数知れず開き、目に焼きついてるアルバム。

それは、母の髪の色そのものだった。

こんな所に、母さんの写真があるわけがない、でも。

確信と疑いという矛盾を同居させたまま、その半分だけ見える写真から目をそらそうとした。

だが、わずかに疑いの気持ちが出た時、イズルは、自然と写真に向かい手を伸ばしていた。

少しずつ引き出す。

引き出せば引き出す程、その疑いは、真実に変わった。

「母さん」

何故、ここで母の写真を発見するのか。

事態が飲み込めない。まさか、と、赤い本を持ち上げる。

背表紙には「S・T」というイニシャル記されている。

それを、母の名前「サヨコ・タカミチ」と理解するまで、時間がかからなかった。

どうして、井之頭が持っているのか。

おそらく、日記を開けば全てわかるであろう。

いや、何となく、感じてはいる。

父と同年代の担任が、母の日記と写真を持っている。

父から、本当の子ではないと告げられた日の出来事としては、あまりにも出来すぎたタイミングだった。

知りたくはない、だけど。日記を持つ手が震える。

もう片方の手が、日記に触れ、ゆっくりと、その過去の扉ともいえる表紙を開こうとした。

その時。

突然、鈍い機械音が唸りをあげ、イズルは、思わず日記をデスクに戻した。

一気に現実引きかえされ、唸りが響く方を振り返る。

暗闇に目が慣れたせいか。端に黒いカーテンに仕切られた、小さなスペースを見つけた。

音の振動に合わせ、わずかにカーテンが震えている。

近づいて、カーテンをそつと開けると、そこには、モニター付の箱型の機械が、低い唸りを上げていた。

## 第1話「東の国より、ひかる・イズル？」拾

「な、何だ、これ」

天井よりやや低い高さの、金属で作られた箱の中に設置されたモニターを覗くと、きょとんとした自分の顔が映し出されていた。

箱は来客を喜ぶように、音を立て、かすかに震えている。

「カメラ、かな」

井之頭が、趣味で妙な発明をしているのは、有名な話である。

おおかた、大昔のカメラか何かを再現したのであろう。

それにしても、何だか、情けない自分の表情が、妙に現実引き戻す。

「呼び出しておいて、何だよ一体。馬鹿らしい」

当たるように機械を叩くと、何かを押した感じがして、同時にモニターに文字が浮かび上がった。

translation mode start!

「トランス……って、翻訳？モード開始？」

文字が妖しく光る。

明らかに触ってはいけないものに触った。

そんな気がして、思わずカーテンを跳ね除け、そして、部屋の外に出た。

「か、帰ろう」

二・三歩歩き、思い出すように足を止めた。

帰る所なんて、ない。

向こうの窓から、まっすぐな廊下に夕陽が落ち、白い廊下をオレンジ色に染める。

かすかに交差する部活動の生徒の声。

元気な声たちと、今の自分の気分との格差に、居場所がないように感じた。

家にも、学校にも。

父さんは、どうしていきなりあんな事を。

当てもなく、放課後の学校を彷徨い、そして、辺り一面ガラス窓で覆われたロビーのベンチに座った。

静かな空間に、自動販売機の音だけが囁く。

窓の外を見上げると、オレンジの空は、冷たそうな鋼色<sup>はがね</sup>に姿を変えようとしている。

まるで、自分と同じように。

イズルは、黙って眺めていた。不思議な色とシンクロするように。いた！イズルちゃん、見つけたの〜！

突然、その鋼色が一瞬で散らされた。足音だけで、元氣一杯と瞭然<sup>ら</sup>。

ひかるがイズルを発見して、駆け寄り、幸せ一杯に腕を組んだ。

「イズルちゃあん、一緒に帰ろうなの〜」

「先に帰れよ、僕、先生に呼び出されているんだ」

「いけず〜、なの。ひかる、待っているの〜」

「いいよ、待たなくて」

他の人間にかまっている余裕のなさ。

口調が冷たくなるのを止める事が出来なかった。

「帰れよ」

イズルは、ひかるの手を振り解き、立ち上がった。

「イヤなの〜」

ひかるは、負けじとイズルに抱きつく。

「もう、離せよ」

押し離そうとするイズル。

まるで押し問答だが、ひかるは、嬉しそうにじゃれている。

その時、近くで、ドサツと荷物が落ちる音がして、二人は、音の方を向いた。

「ひひひひひ、ひかるさんッ！そんな奴に近づいてはいけません！」  
突然現われた庵野が、どこかと歩き、イズルから、ひかるを引き離そうとしている。

「イヤなの、ひかる、イズルちゃんと帰るの」

「駄目です、ひかるさんッ！」

「痛ッ、ひかる、引っ張るな！」

ざわめきの増加は、そのままイズルの苛立ちの増加に繋がった。

「皆さん、もう下校時間はとくに過ぎているわ、何をしていらっしやるの!？」

華やかな声が、ざわめきを切り裂くように、突き抜ける。

歯切れ良い足音で、三人のもとに歩み寄って来たのは、生徒会長の結花乃だった。

「ひかるさん、この女、あなたを獲って食いますよ！僕が守りますッ」

「何ですって？ア・ン・ノ・ジヨおお」

結花乃は、庵野の足を密かに踏みつけながら言った。

「いつ、ぎぎぎ……すみませんッ！嘘です」

庵野があっさり白旗を上げると、結花乃はひかるを、ゆっくり、鋭く見据えた。

「あら、あなた、朝の一年生ね。人のイヤがる事は、おやめになつてはいかが？」

そう言つてイズルの手を取り、ひかるから引き剥がした。

「イヤがつてないの」

ひかるも負けじと、イズルを引き寄せる。

「イヤがつていますわ！」

取り戻す結花乃。

「イヤがつてないの！」

更に取り戻すひかる。

「イヤがつてますわ！」

「イヤがつてないの！」

「ますわ！」

「ないの！」

「ますわ！」

「ないの！」

女子二人に繰り広げられる、イズルのキャッチボール。

「むううう」

「むううう、なの」

仕舞いに二人が、イズルの左右の手を、引っ張りあう。

「ちよつと、ひかる、会長、痛い！」

「宝路君が痛がつているじゃないの！一年生、離しなさい！」

「離さないの」

「ぐわあッ！だから、痛い、痛いって！」

「ひかるさあん！そんな奴の手を触らないでえええエエエ！」

庵野が、ひかるの手を掴み、参戦すると、イズルと結花乃の手が  
離れ、勢いよく、イズル、ひかる、庵野は倒れこんだ。

うなだれる三人。

唐突な出来事に閉口する結花乃。

「いいかげんにしろよ！」

イズルは、立ち上がり一喝すると、走り出し、

「イズルちゃん！」

「宝路君！」

「ひかるさんッ！」

三人は、すぐさま後を追った。



## 第1話「東の国より、ひかる・イズル？」拾巻

もうイヤだ、家も、学校も！ どこかに消えてしまいたい！  
走りながら、全て振り払いたかった。だが、どんなに、走ろうと  
も、拭い去れない。

今の自分も、過去も。でも、走り続けた。

そして、息が荒くなり始めた時、

えー、二年D組、宝路イズル。理科準備室に来るように  
柔らかい井之頭の校内放送が響いた。

「遅いんだよ！」

偶然にも、理科準備室の近くを走っていたイズルは、すぐ到着し、  
荒々しくドアを開けた。

「宝路です！」

相変わらず静まり返っている部屋。

井之頭は、まだ、放送室から帰ってきていないようだ。

今度は、廊下で「イズルちゃん！」と、ざわめく三人の声が聞  
こえる。

「また来た。もう、今日は放っておいてくれよ」

イズルは、とっさに先程の機械が置いてあった、カーテンの中に  
身を隠し、息を潜めた。

「イズルちゃん、奥の準備室にいるの」

「ひかるさん、あんな奴、構わなくて良いですよ。帰りましょう」

「そうよ、一年生。アンノジョーも。もう、あなた達はお帰りなさ  
い！」

理科室に三人の騒がしい声がこだまする。

「はあ」

イズルが、額を押さえ、機械を背にもたれ掛かった時。

突然、背中からまばゆい閃光が、突き抜ける風のように、目の前  
のカーテンを射した。

振り返ると、モニターが四角く光り、準備室は、カーテンの中だけ真昼のようになっていた。

「な、何だ？ 一体!？」

| translation mode OK!

| translation mode OK!

| translation mode OK!

閃光を発する画面で、文字が心臓の鼓動のように点滅している。

何故か、その赤い文字の妖しさに、戦慄を覚えた。

「眩しい……」

片手で目を隠し、どこか、光を消す所がないか、もう片方の手で、モニターのまわりを手探りする。しかし、それらしきものは見つからない。

そのまま探し続けていると、指先がモニターに触れ、すると、突如、爆風がイズルの髪を激しく煽り、囲っていたカーテンを翻した。そこから光が暗い部屋一面を白く染め、次の瞬間、無数にのぼる光の触手がモニターから蠢き出て、巻きつくようにイズルの腕を捉える。

「何だ!？」

手を解こうとした。だが、触手はイズルを、モニターに取り込むように絡みつく。

反抗するイズル。しかし、どんどん引きずりこまれる。

「うわあああッ!」

学校中に響き渡るようなイズルの絶叫を聞きつけ、三人は準備室に入ってきた。

既に、イズルの左腕はすっぽりモニターの中に飲み込まれている。

「イズルちゃん!」

真っ先にひかるがイズル元に駆け寄り、腰に抱きつく。

だが、どんどん体は、引きずられる。

「宝路君!」

結花乃が、イズルの手を掴むと、その瞬間、腕に巻きついていった

光の触手は、更に激しく踊るように、イズルに絡みつき、イズルは、体ごと宙に浮かんだ。

結花乃が、更に硬く手を握る。ひかるは、必死にイズルの胴にぶら下がりながら、手を離さない。

「ひかるさあああああんツ！」

庵野は思わず、スライディングして、ひかるの足首を両手で掴んだ。

機械が不敵に、笑うような低い唸りを上げる。

そして、モニターが一度大きく光ると、四人は機械に飲み込まれ、声も音も光も、全て一瞬に消えた。

部屋にはただ、暗闇と静けさだけが残った。

第1話「東の国より、ひかる・イズル？」拾貳

イズルちゃん……

宝路くん……

帰る所なんて、ない……

母さん……

宝路、帰りに理科準備室に来るように……

わたくしのお父様が指揮する学校で……

貴様、僕の天使を……

ひかるの事、お嫁さんに……

お前は、小夜子と、他の男の間に生まれた子供……

ただ白い光に包まれていた。

だが、その光の奥にははつきりと、朝からの出来事が見えた。

小夜子、目を覚ましてくれ……

おめでとうございます、女の子ですよ……

もしかして、お腹の中の子供は……

小夜子、幸せになつてくれ……

仕方ないの、親が決めた婚約だから……

私も、ずっと小夜子を想っていた……

宝路も僕と小夜子の事、応援してくれるんだね……

お前と小夜子はお似合いだよ……

これは、父さんと、母さん、それに……！

どんどん意識が遠くなる。

やがて光は心地の良い暖かさで、包み、眠りにつくように意識を奪った。

痛い。

体を這う鈍痛で目を覚ます。

地面に凹凸を感じ、ゆっくり瞳を開いたが、射すような太陽の光に思わず閉じる。

呼吸をすると、熱が喉の潤いをどんどん奪っていった。

「みんな……？」

ひかる、結花乃、庵野がまわりに倒れている。

揺り起こすと反応があったので、少し安心した。

冷静になって、辺りを見渡すと、土が剥き出しの地面が延々とどこまでも続き、遮られる事のない日光が照らしつけている。

今さっきまでいた学校も、まわりに建っていたはずのビルも、何もない、ひたすらの荒野。

一面ベージュ色の大地。鋼色だったはずの空は、青く、どこまでも高くつきぬけていた。

「い、一体ここはどこなんだ……？」

【第一話 終】

## 第2話「大昔でバーステイを……」巻

荒野に吹き抜ける風が砂を巻き上げる。

その風を合図かのように、三人も目を覚ました。

「みんな、大丈夫？」

イズルは、三人が起き上がるのを手伝う。

「ここは、どこですか？」

結花乃は、はっきり意識が戻らずとも、気丈な口調だった。

「わからない、気付いたらここに」

淡々と話すイズルの後、フェイドアウトしたようなしばらくの沈黙は、突然の出来事を飲み込めない、という事実を物語った。

また、寂しそうな音を立て、風が吹きぬける。

「電話、失くしちゃったのー！」

突然沈黙を破り、ひかるはポケットを探し出した。

「ひかるさん、大丈夫ですかっ？」

と、いいつつオロオロするだけの庵野。

「そうか、電話通じるかも！」

イズルは急いで携帯電話を取り出し、

「あ、充電が切れている」

と、携帯電話のソーラーパネルを空にかかげる。

すると瞬時に充電が完了し、それと同時に着信が来た。

「あ！ひかるの携帯から着信が着た」

「よかったなのー」

「誰か拾ってくれたんだね」

通話ボタンを押すと、立体映像映写機から、白衣姿の井之頭の立体映像が映し出され、その、瓶底眼鏡が光った。

「先生！」

準備室に、この電話が落ちていたんだ。宝路、呼び出しておいで済まなかった

「い・いえ、大丈夫ですけど。それより、準備室にあった機械何ですか」

やはり、飲み込まれたのは君達だったか

「飲み込まれた？」

そうだ

「一体何なんです？」

……隠しても仕方がないので、正直に言う。君達が飲み込まれたのは、時空の狭間だ

「時空の狭間？」

今日、2007年4月20日と、まだ調査しないと決まっていますが、数百年前のある時代の時空の狭間が交差しているらしい

「交差しているって？それに、数百年前って」

つまり、君達は時間を遡ったんだ

「そんな、まさか。だって、電話繋がっているじゃないですか」

まだ少しだけ時空の狭間が重なっているんで、この機械を通して、重なって辛うじて電話だけは繋がっている

「僕達を帰して下さい」

今は、無理だ。いいか、よく聞いてくれ。次、時空の狭間が繋がるのは、こちらの明日、そして、そっちの約三ヶ月後だ。その時には、帰って来る事が出来る

「さ、三ヶ月」

そう。何とか、三ヶ月無事でいてくれ。必ず助ける

イズルは立ちくらみしそうになったのを、何とか知れないように押さえた。

一応翻訳モードでそっちに行ったので、言葉には困らないはずだ  
「でも」

その時、井之頭がいつもの瓶底眼鏡を外し、イズルは言葉を止めた。

意外にも美形な顔立ちもそうだが、その隠れていた目元が、あまりにも似ていたのだ。自分に。

帰ってきたら、君に話したい事がある

「先生は、一体」

君は、本当に……よく似ている

イズルの瞳を見つめる井之頭の瞳は、優しかった。

それは、教師としてでもなく、ましてや男性としてでもない、特別な暖かさだった。

「先生」

井之頭の立体映像が乱れる。

もうそ……そろ……切れ……うだ。頑張……てくれ

「先生！」

ど……か、無事……イズル……

そして、完全に消えた。

「ど、どうしろって言っただよ……」

荒野を走り抜ける風が、更に強く、強く、勢いを増しせせら笑うように通り去っていった。



## 第2話「大昔でバーステイを……」 弐

その夜 荒野から離れた街。

雲が足早に去り、月明かりが、漆黒の夜空を淡く白く染める。

そして、その下に浮かび上がる、朱色の屋根。

広々と土地を使い、龍で飾りつけされた横長の屋敷。

それは、その街における、権力そのものを語っていた。

一部屋だけ、窓から漏れる明かりがない。

ただ、部屋の中で、肌が重なり、吐息が部屋中に薰っていた。

そして、沈黙。

「待つて、月下<sup>げっか</sup>。行かないで」

乱れ髪の女が、すぐるように止めた。

白い絹の布から、裸体の曲線が生々しく見える。

「また、来る」

月下と呼ばれた、少年とも、青年とも言い難い、美しい男が、背を向けたまま、やわらかい声で言った。

窓から差し込む月明かりで、あらわになった、月下の象牙色の肌が浮かび上がる。

真夜中を彷彿させる黒髪。

切れ長で亜麻色の瞳、そこから伸びる長い睫<sup>まつげ</sup>。

そして闇の声色を奏でる唇。

月下の妖しい美貌は、男性はおろか、その辺の女性にも、到底敵わなかった。

それだけではない。

しなやかに鍛えられ、屈強さと繊細さを備えた身体は、まるで芸術品のようなだった。

「お願い、私を連れて行つて」

女が、濡れた声で言つと、その身体を包んでいた絹の布が、するりと床に落ち、白い肌がむき出しになった。

それを、月下が拾い上げる。

「それは出来ない」

「私は、主人ではなく、あなたの事が」

月下は手に持っていた絹で、女の身体を包み、その唇を唇でふさいだ。

「貴女は、ここで、何ひとつ不自由のない生活が出来る。それを、むぎむぎ捨ててはいけない」

「私には、貴方のいない生活なんて。」

月下、貴方は、いつも、風のように私の元を去ってしまう。いつか、本当にいなくなってしまうそうで、私、もしそうなったら……」

「どうしてそんな事を？ 俺は、いつも貴女の元に来ている。今宵も」

「でも……わからない、貴方が。私は、貴方の本当の名前も知らない。まわりが、月下　そう貴方を呼んでいるだけで。どうして？

貴方は名前も教えてくれないの？」

「俺は、俺。貴女の目の前に居る、この月下が全て」

「いや、そんなの！ 私は、全てを知りた……」

月下は、突然女を抱きしめ、

「静かに。誰かに聞かれる」

耳元で甘く囁き、すっと、耳に口づけ、優しく頭を撫でた。

女は、言葉の代わりに、一粒、また一粒と涙をこぼす。

月下は、指で涙を拭くと、素早く衣を身に纏い、細身の剣を背負い、窓際に立った。

月光を背負い立つ月下の美しさは、別の世界に生きる人間と言わんばかりだった。

それを感じてか、女は、絶望したように脱力し、膝をつき、月下を見上げた。

「月下、愛しているわ」

「……また」

窓から飛び出した月下は、見張りの兵の目を盗み、屋敷の敷地か

ら去った。

そして、道標のように光る月を一度見上げた。

「月に光の輪……何かが、始まる」

そして、また軽やかに走り出す。

既に閉店している店ばかりの街に、一筋の影を落として。

## 第2話「大昔でバーステイを……」参

「一体どこまで続くんた。歩いてても歩いてても、きりがない」

イズルは、月明かりを背に呟いた。

「もう、くたくたなの」

「ひかるさんッ、大丈夫ですかッ！」

庵野は、疲れ切ったひかるを心配しているが、ただ、オドオドしている。

「わたくし、もうダメですよ」

結花乃が脱力したように、その場に座り込む。

つられたように、他の三人も座り込んだ。

どこまでも続く夜の荒野。

まるで四人は、永い遠に続く絨毯の上に置かれた駒のようだった。

「会長、大丈夫？」

「先程、足をくじいて……」

「腫れている」

イズルは、ハンカチを取り出し、結花乃の足首を固定した。

月光がイズルの横顔を照らしている。

「宝路君……」

結花乃は一瞬硬直したが、頬を赤く染め、うつむいた。

「月明かりって、こんなに明るいんだね」

イズルは、空を、広がる大地を見渡した。

ベージュの絨毯にそびえ立つ数々の岩も、月光に浮かび上がる。

「こんな明るい夜は、初めてですわ」

「見て、会長。月に、輪がかかっている、こんなにくつきり見えるなんて」

「宝路君……」

結花乃の瞳が月光を映し、潤んで揺れる。

「イズルちゃん、ひかる、おなかすいたなの」

突然、ひかるが後ろからイズルに抱きついた。

「うん、僕もだよ」

「でも、ひかる、イズルちゃんと一緒だからいいの」

幸せそうに、イズルの背中に頬を擦りよせるひかる。

「ひかるさあんツ、こんな奴にくつついてはいけません！」

庵野が飛んで来た。

「そうよ、一年生、宝路君はお疲れですよ。離れなさい」

「ひかる、イズルちゃんと一緒なの」

「ダメです！」

「ダメですわ！」

二人が同時に言った。

「ああ、もう。喧嘩している場合じゃないよ」

イズルが静め、

「どうしよう」

ため息混じりに荒野を見渡した。その時、少し離れた岩陰に、サツと人影が隠れた。

「今のは……？」

## 第2話「大昔でバーステイを……」四

「どうかしまして？」

「いや、会長、今、見えなかった？ あ、あの岩の影に」

イズルは、思わず立ち上がった。

「人が」

「ほ・本当か、宝路」

「うん。庵野は見なかった？」

「見ていないよ。まさか、獣<sup>けもの</sup>じゃないだろうな」

庵野の声は震えていた。

「……行ってみよう」

「えええ？ やめるよ、何が起こるか」

「じゃあ、庵野はそこで待ってて」

イズルは歩き始めた。

「あつ、イズルちゃん、どこ行くのなの、ひかるも行くの」

「わたくしも、行きますわ」

二人はイズルの後を歩く。一人取り残される庵野の前を、夜風が駆け抜ける。

「え？ ちょ、一人にしないでえ〜！」

結局、庵野もイズルを追った。

そこにたどり着いた三人は、イズルを先頭に、おそろおそろ、岩陰に回り込む。

しかし、そこには、人はいなかった。

だが、岩の裏に意外なものを見つけた。

岩に、四人とほぼ同じ大きさの、仏像が壁面に刻み彫られている。

「こついの……」

イズルは仏像に見入った。

「教科書に載っていた。しかも、風化してない。綺麗なままだ」

その言葉に、他の三人もまじまじと、岩肌に刻まれた仏像を見つ

めた。

「本当にここは、数百年前なんだ」

声を出すのがやっとだった。

初めて叩きつけられた過去の姿に、背筋が凍った。

「教科書に載っているのは、神殿みたいに大きいんだけど、こんな小さいもあるんだ。でも、多分これ、僕らの時代には無くなっている……よね」

仏像が、月明かりに、わずかな微笑みを浮かべる。

しかし、その穏やかな笑みさえ、戦慄に思える程、そこにいる全員は憔悴<sup>せいすい</sup>しきっていた。

「僕たちは、か、帰れるのか？」

庵野の声は震えた。

「三か月、生き抜くんだ」

イズルは、そんな事出来るのかという不安を抑えて言った。

「こんな、電気も何も無い所で？」

「でも、やるしかない」

「む、無理だ。僕たちは終わりだ」

庵野は、岩を背に座りこんだ。

「しつかりしろよ、な？ とにかく人をさがすんだ。町もあるかもしれない」

「その前に力尽きるよ」

庵野の言葉を返せなかった。

約一日、飲まず食わずで、不安の中、ずっと歩き続けた。

肉体的にも、精神的にも限界だった。

ただ、そこにいる事しか出来ない状態。

全員が黙りこんだ。

「フフフ……」

突然、岩陰から、笑い声が響き、四人が息を飲んで顔を合わせた。イズルが他の三人の前に立つ。

すると、頭にベールをなびかせ、甲冑<sup>かっちゅう</sup>をまとった少年が、四人の前

に現れた。



## 第2話「大昔でバーステイを……」伍

「お困りのようだね」

少年はやや低い声で言くと、四人を見つめた。

ベールから垂らす長い前髪の隙間から、大きい黒目の、エキゾチックな瞳が覗く。

見た目は女性的で、年齢も四人と変わらないように見えるが、ずいぶんしっかりした口調だった。

「君達のようなお若い男女が、こんな所で彷徨っているとは。何か事情があると見た」

「はい……あなたは？」

イズルが真つすぐ見据えて問うと、少年は、口の端を上げて微笑んだ。

「我々は、この辺りで商売をしている者です。僕の名は、そつじん総蘭。皆は蘭舞らんぶというあだ名で呼びます。どうぞお見知り置きを」

「僕は、イズル、宝路たかみちイズルといいます」

「よろしく、イズル。今、ひと仕事終えて、これから、街に帰るところです。」

もしよろしければ、ご一緒にいかがでしょう？」

「宝路、助けて貰おうよ」

庵野が、サツとイズルに耳打ちした。

大丈夫かな。でも、今は、他に方法がないしな。

「フフッ。見ず知らずの人間に付いて行くのが不安と見た。ご心配は無用。街はもうすぐですし、ただ帰るついでなので、ご安心を」  
蘭舞と名乗る少年は、また、口の端を上げて微笑んだ。

「みんな、どうする？」

イズルの問に三人は、うなずいて、OKのサインを出した。  
イズルもうなずいて返した。

「是非お願いします」

「わかりました。今、仲間を連れて参ります」

蘭舞は一礼すると、ベールをなびかせ、足早にその場を去っていった。

「あの、蘭舞というお方、わたくし達と同じ位の歳でしょうか」

「多分ね。随分しつかりしているよな」

「イズルちゃんもしつかりしてるなの」

「ひかるさんッ、こんな奴の事、褒めなくて良いですよ！」

「こんな奴、じゃないの〜！」

「こんな奴、じゃないですわ！」

ひかる、結花乃に同時に非難され、庵野がたじろいだその時、地を叩く無数の音が近づいて来た。

四人が驚き、音の鳴る方を見ると、辺りに激しい土煙りが立ちこめ、数十人の馬に乗った男達の隊列が、こちらに近づいて来る。

先頭集団には、高い襟のマントをまとい、黒い髪を束ねた長身の男がいる。

その男は、集団の頭であろう。

いやがおうにも、その男の迫力が目についた。

そして、その先頭集団の一角に、先程の蘭舞がいた。

「こんなの、初めて見た」

イズルは、思わず呟いた。

開いた口が塞がらない。

騎乗した男たちの隊列は近づき、四人の前に止まる。

それは、実に見事なさばきだった。

決して穏やかには見えない馬を操る、鎧をまとった男たちは、イズル達の時代には決していない気迫を帯びている。

中でも頭と思われる男は、その瞳だけで、人の心をふるわす威厳にあふれている。

四人は、ただただ、放心に近い状態で、騎乗する男達を見上げた。

【次回の話より、基本的に毎月5・15・25日に更新致します】

## 第2話「大昔でバーステイを……」六

「皆さん、お待たせしました」

蘭舞は馬からひらりと降り、そして、頭と思われる長身の男を見上げる。

その眼差しは、恋人を見上げる女性のように、妖しい色気を帯びていた。

「総馬様、この者達でございます」

総馬と呼ばれた頭は、馬の上から無言で四人を見おろす。

イズルが目に残まると、急に馬から降り、イズルの前に立った。

総馬は黙ったまま、イズルの目を見据えている。

凄い迫力……。

だが、イズルは、何故か目をそらす事が出来なかった。

総馬は、イズルのあごを、手でくい、と持ち上げる。

「そ、総馬様！」

蘭舞が、慌てた様子で止めに入るが、総馬は、まるで蘭舞が目に入らないかのように、イズルに見入っていた。

うとましそうに爪を噛む蘭舞。

「良い……」

総馬は、低い声で言い、にやりと笑った。

「この者達を連れて行く」

総馬はイズルから手を放し、馬に戻る。すると、まわりに列を成していた男達が、馬から降り、次々と四人を馬に乗せた。

イズルが馬に乗っていると、そこに蘭舞が、つかつかとやって来て、イズルを睨みつけた。

「いい気になるな」

「エ？」

蘭舞が何を言いたいか、皆目見当がつかない。

「総馬様に気に入られたからって、いい気になるなよ」

そう言うと、更に鋭くイズルを睨み、頭のペールをなびかせて、自分の馬に戻った。

「な、何だ？」

何か総馬に媚びる事をしたわけでもない。

第一、さっきの瞬間の出来事で、総馬が自分を気に入ったかどうかなんて、わかるわけではない。

まあ、いいや。助かったんだし。

そんな事を考えていると、隊列は動き出した。

荒野を隊列が進む。馬の足音のリズムが単調に聞こえ、退屈に思えた時、先程の総馬の言葉を思い出した。

良い。

何故か、この言葉がひっかかる。

だが、この時のイズルには、この言葉の意味を知る由もなかった。延々と続く荒野に、やわらかい月明かりが落ちる。

こんなに優しい明かりは、初めてだった。

いや 初めてではない。遠い昔に感じたような気がする。

そう、多分、その昔、母に抱かれた、いや、母の胎内なかに居た時のような、そんな優しさ、懐かしさに溢れている。

父に言われた事も、井之頭の事も、今日の出来事も、溶けていくようだった。

気持ちがどんどん研ぎ澄まされ、余計な物が無くなっていく感覚。こんなに、ゆっくり、やすらかに自分を感じたのは、初めてだった。

僕は、ずっと、本当の自分を探していたのかもしれない。

素直に生まれた気持ちに、何故か、涙が溢れそうになった。

「ねえ、イズルちゃん」

隣の馬に乗っていたひかるに、突然声を掛けられ、目をこする振りをして涙を拭う。

「うん？ 何、ひかる」

「お誕生日おめでとう、なの」

「エ？ …… あ」

あまりに突然の混乱に巻き込まれ、すっかり忘れていた。確かに「経過時間的」には、誕生日を迎えている。

「でも、今って何百年も前だろ？ これって誕生日なのかな？」

「うーん、なの。大昔で誕生日なの」

「何か、変だね。あはは」

久々、笑うことが出来た。

ひかるも、疲れは隠せないが、相変わらずの可愛い笑顔を浮かべた。

隊列は進み続ける。

一時間経った時、荒野の奥に緑が見え始めた。

そして、その奥に民家と思われる屋根が見えた。

## 第2話「大昔でバーステイを……」七

四人の顔が明るくなる。

良かった、助かった！

ここに来て初めて「生きた気」がした。

ひかると結花乃に笑顔がこぼれる。

庵野は、感極まってか、泣いていて、不覚にも笑ってしまった。

「着いたらさっさと降りることだな」

蘭舞が、また突っかかってきたが、町が見えた嬉しさで、何とも思わなかった。

夜風に優しく揺れる木々がどんどん近付く。

そして、町の入り口に隊列が止まった。まず、イズルと庵野が、馬から降りる。

イズルは、総馬の元に駆け寄った。

「あの、ありがとうございました！」

総馬は、馬にまたがったまま、無言でイズルを見おろしている。

「本当に助かりまし……」

その時、首筋に冷たいものを感じた。

「動くな」

蘭舞が、背後から、イズルの首に剣を当てている。

「何ッ」

「ふ……はははは！」

総馬は、今までの無口な状態からは、想像出来ないような大声で笑いだした。

「た、助けてえ！」

後ろで響く庵野の絶叫で、庵野も自分と同じ状態だと感じる。

「何をする！」

イズルが叫ぶと、目の前に、両手を縛られ、布で口を塞がれた、ひかると結花乃が、男達に連れて来られた。

「ひかる、会長！」

二人は、助けを求めているが、口を塞がれ、何を言っているか不明だった。

「畜生、二人を放せ！ お前ら、商人じゃなかったのか！？」

「そう、商人さ……ただし、人を売る、ね」

蘭舞はイズルの耳元で嘲笑する。

「こんな荒れに荒れている世に、女が男装もせず歩くなど、売り飛ばして下さいと言っているようなもの」

「売り飛ばす？」

「そう、若い女は高く売れる」

「そんな事はさせない！ 放せ！」

「馬鹿か、貴様。総馬様の一言で、ここにいる男全員で、あの女どもを辱める事も出来るのだぞ？」

蘭舞は口の端を上げて笑み、持っていた剣をスーッと引く。

イズルの首筋に、赤い線が入り、血が滲んだ。

「よせ、蘭」

総馬が蘭舞を諫めると、蘭舞は、イズル以外に気づかれないように舌打ちして、剣を止めた。

「女を運べ」

総馬の指示に、男達は、ひかると結花乃を無理矢理馬に乗せる。

二人は必死抵抗するが、男達の力を前に、まるで歯が立たなかった。

「ひかるさあん！」

庵野は、感情任せに暴れだしたが、側にいた男に腹を蹴られ、その場にうずくまる。

「庵野！」

イズルは、総馬を鋭く睨みつけた。

「総馬、絶対に許さない」

「貴様、分をわきまえろ！」

蘭舞は、イズルの言葉に逆上したように叫ぶと、イズルの背中を



蹴り、倒れこんだイズルの腕を切りつけた。

白い学生服が切れ、みるみる赤く染まる。

「蘭、勝手な真似はよせ」

「そ、総馬様！……申し訳ありません」

蘭舞はうつむく。イズルは、総馬を睨み続けた。

「フ……地の果てまで追って来そうな目だな……」

総馬は、満足そうに笑みをこぼすと、マントを翻し、うねりを上げるような声で、指示した。

部下達が速やかに動き出す。

「お待ち下さい、総馬様！こいつらを片づけないのですか？！」

蘭舞が、総馬に食らいつく。

「放っておくが良い。この町は、面識のない者は即座に消す五源商団の町。」

遅かれ早かれ結果は同じ事」

「同じ事……って。何故です！？いつもはこのような事は……」

「何か不服か」

総馬はそれ以上言葉を言わなかった。

しかし、全身から出る威圧感に、蘭舞は閉口し、剣を納めた。

それを確認した総馬は、騎乗し、先頭に躍り出る。

「あの女ども、滅茶苦茶にしてやるよ」

蘭舞は、吐き捨てるようにイズルに言うと、馬に乗り、隊列の先頭集団に加わった。

イズルは、出血のせいか意識が朦朧としだす。

だが、離れ行く隊列をしっかりと瞳に捉え、最後の力を振りしぼり、立ち上がり、叫んだ。

「ひかる、会長ーッ！必ず、必ず助けるからー！」

返事はなかった。そして、まもなく、隊列は消えた。

## 第2話「大昔でバーステイを……」拾

「……宝路、大丈夫か」

「何も出来なかった……！」

「悔しいけど、い、今は仕方ないよ。それより、止血しなきゃ」

庵野は、イズルの上着を開けようとした。

「いや、大丈夫。触らないで」

とつさに庵野の手を払う。

「だ、大丈夫なわけないだろ」

「それより庵野は大丈夫？」

「う、うん」

「良かった」

更に急激な目まいが襲い、イズルは座り込んだ。

「た、宝路！」

庵野の声が、辺りに響く。すると、木々の奥から、草をかき分け何かが近づく音がした。

「庵野、しっ」

イズルが庵野の口を押さえる。辺りが静まり返ると、人の声が聞こえた。

「いた？」

「いえ、見当たりませんね」

女と男の声。明らかに何かを捜している会話だった。

「さっきの総馬の話だと、この町の人は、よそ者は殺すとか言ってたんだ」

イズルの言葉に庵野は、思わず息を飲む。

「向こうを捜してみましようか」

男の声が響くと、足音が遠ざかった。

「行ってみたんだ」

イズルは庵野の顔から手を放した。緊張から解放されると、腕が

激しく痛みだし、息も上がってきた。

痛い。

意識が遠くなる。

「うわああああ！」

突然、庵野が後ろを向いて叫んだ。その叫びで、また意識が少し戻り、後ろを向くと、そこに、いつの間にか、眼鏡をかけた長髪の男が立っていた。

その右手には、研ぎ澄まされた剣が握られている。

「おや……そのいでたちは、異国の方で？　こんな夜更けに、我が五源商団に何の用でしょう？」

やわらかな口調とは裏腹に、男の目が鋭く光る。

「僕達は……」

一か八か、イズルが助けを求めてみようとした、その時。

「亮！」

気の強そうな、派手で、豊満な身体の女も現れた。

「客人のようです」

「ふーん、果敢にもウチに来るなんて。珍しい事もあるもんだねエ」

「貴方達に恨みはありません。しかし、我が五源の掟　よそ者は、ただちに消えてもらいます」

男は、剣を振り上げる。

「お願いです！　聞いて下さい！」

イズルの叫び声もむなしく、剣は振り下ろされた。

## 第2話「大昔でバーステイを……」九

もうダメだ！

イズルは、覚悟し、瞳を閉じた。

ごめん、ひかる、会長。

スパーン！

突然響く乾いた音。おそろおそろ顔を上げて見ると、女がどこから持ってきたのか、ハリセンのような物で、男の頭を気持ち良い位豪快に叩いていた。

男は、頭からズレたターバンと、眼鏡を直しながら頭を押さえる。

「痛た……何をするんです、純麗<sup>じゅんれい</sup>！」

「何をするも何も、このコ達、怪我してるじゃないかい」

「でも、私達の掟では、部外者は無条件抹殺と」

「でも、怪我してるだろ？」

「だから、掟が！」

「アタシは、このコらを助けるよ」

「エ？ 皆に何て言われるか！ この前だって……」

「ゴチャゴチャうるさい男だねエ。助けるったら助けるんだよ！」

「でも！」

突然、純麗と呼ばれた女が、危ない目つきになり、男の胸ぐらを掴む。

「アンタ、団長のアタシの言う事が、聞けないってのかイ？」

「そつ！ そんな事ありませんけどお」

男は精一杯の愛想笑いを浮かべた。

「じゃ、助けるのは賛成だね？」

「いや、でもそれは……」

「もう一回だけ聞くよ。さ・ん・せ・い！ だよな？」

「はい」

突然の出来事に、呆気にとられるイズルと庵野。純麗は、男を解

放すると、こちらに近づいてきた。

「やあ、アタシは、純麗。五源商団の団長やってるんだ。で、この長髪眼鏡は、アタシのいとこの迦亮<sup>かりよう</sup>」

「僕は、イズルです」

「何だかワケありって感じだねエ。アタシで良かったら、話してくらん」

「あの、僕の友達がさらわれたんです！ 助けて下さい……」

イズルは、立ち上がったが、急激な目まいに襲われ、そのまま目の前が真っ暗になり、意識を失った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4726d/>

---

超劇的冒険 東方真文録

2010年10月19日22時16分発行